

パパ活したら相手が義父で、ブチギレお仕置き愛撫で処女なのにイキ狂わされ、メス堕ちさせられました。

サンプル（一部抜粋）

「パパ活？」

「そう！おじさんの相手して、お金もらうの。」

「えー…。」

そういうのって危なくない…？」

「お茶だけでもいいし？」

あ、でもえっちしたら、いっぱいお小遣いくれるんだよ。」

友達のユリが髪を指でくるくるしながら、パパ活を私に勧めてくる。

「でも…私、経験ないんだよ？」

初めてがおじさんはちよつと…」

「処女は高く売れるし、いいじゃん！

だって、お金、必要なんですよ？」

「……それは…そうだけど……。」

「それにえっちって全然気持ちよくないからW
寝転んでスマホ触ってたら終わるよ。」

「…えー…そうなの…？」

「うん、余裕！」

「有紗はかわいいし、絶対稼げるから！」

可愛いのは私じゃなくてユリだし、ユリはモテるからなあ。
私は小さくため息をついて、そっと財布の中身を見つめる。

「はあ……」

本当に今月、どうしよう。

「やっぱり親にお金、お願いできないの？」

「んー……」

お母さんが生きてたら、助けてもらえたかもしれないけど……。

私がこんなにお金に困ってるのは…実家を出たから。

お母さんは私が小さい頃に離婚して、女手一つで育ててくれた。本当に尊敬できて…大好きだったな。

でも、きっと無理をしてたんだろうな……。頻繁に体調を崩していた。子供だった私には……家事をする事くらいしか出来る事がなくて、もどかしかったのを覚えてる。

そんなお母さんは、私が高3になった時に再婚した。

紹介してくれたのは、高身長のメガネをかけたすらっとした男性。

「……よろしく。」

低くそう挨拶をしてくれたけど、メガネの奥の瞳がドス黒く見えて……なんだか怖かった。

真面目そうだし、悪い人ではないんだろうけど……表情は常に真顔で無口……。

正直言って、仲良くはできないだろうなと思っていた。

お母さんは……再婚したことで安心しちゃったのかな。私が大学生になったばかりの頃、急に倒れてしまつて結局はそのまま……。

(中略)

名前……さすがに本名はまずいよね。

有紗の『リサ』でいいかな。忘れなさそうだし。

あとは写真か。んー……鼻から下とかの写真でいいのかな。

えっとトリミングして……と。

あとは条件だけ入力して…と。

よし、これでできた！

登録のボタンをぽちっと押して、一旦スマホを閉じて、メッセージがくるのをただ待つ。

まさか…このあと出会う『パパ』がお義父さんだなんて、想像することもなく。

待つこと10分。

メールの通知がブーブーと何度も鳴りはじめた。

「あ…！」

私はスマホを手に、メールを確認する。

「えっと……」

『処女まんこ、おじさんがもらっていいの？』

はじめに確認したメールはそれだった。

なにこれ、気持ち悪い……。

『希望通り10万ですから、NN希望！』

NNってなに…。

すぐにネットで調べる。

生で中出しすること……？嫌に決まってるでしょ……？

「はぁ……」

なんか、変な人しかない…。

小さくため息をつきながら、メールを流し読みしていく。

その中でたった一通、普通のメールがあった。

『はじめまして。』

よかったら、食事からでもいいかがですか？』

あ、普通っぽい人がいる……。

相手のプロフィールを確認してみると、その人も登録したばかりのようだった。
名前はK。年齢は50歳。

プロフィールには何も書いてないけど…登録したばかりだもんね。

(中略)

「え……？」

私はフリーズしてしまった。

だって私を冷たく見下ろす『パパ』は…お義父さんだったから。

「……え、お義父…さん…なん…で…？」

頭がズキズキする。状況を理解できない。

なんでお義父さんが？さっき、リサさんって呼んだよね、私の事。つまりお義父さんがKさんだったってこと…？

「…有紗。何をしてる？」

お義父さんの声が低く響く。明らかに怒っているのが分かる。

「っ…ご、ごめん…なさい…」

顔から血の気が引いていくのを感じる。どうしよう…怖い…。

耳がキーンとして、身体が震え始める。

ここから言い逃れなんて出来ないよね…？どう…しよう…。

「行こうか。」

お義父さんは冷たく私を見下ろしたまま、ぎゅっと手首を握ってきた。

「っ…！」

手が妙に熱い…。

「はな…して…」

「どうしてだ？」

お前が言ったんだろ？ホテルがいいって。

俺は確認したよ。本当に初めての相手が俺でいいのか。お前が踏みとどまってくれる事を願いながらな。」
冷たい言葉が刃のように突き刺さる。

「っ…ごめん…なさ…い…」

「お前、自分が何をしようとしたか、分かっているのか？」

「ごめん…なさい……」

「謝罪はいらない。」

分かっているか聞いてるんだ。

どれだけ危険な事をしようとしたのか。」

「っ…」

返す言葉がない…。

確かに私は…軽く考えて、お金のために身体を売ろうとしていた。

危険だとは理解はしていたけど…寝転んでるだけでいいんだって…思ってた。いた。

「お前に教えてやるよ。」

何もかも全部。」

(中略)

「無防備にも程がある。」

俺以外にも、そんな顔を見せるつもりだったのか？」

お義父さんはそう言いながらゆっくりと、私の服の中へと手をねじ込んでいく。

「っ…や…ダメ…っ」

「ダメなら、そんな女の顔しちやダメだよ。」

「して…ない…。」

「してる。」

「っ…」

女の顔ってどんな顔なの…。自分じゃわかんないけど…、お義父さんの事を男の人として意識してるはずもないのに、女の顔なんてするわけがない。

私はそう思いながら、お義父さんから目を逸らす。

「有紗。」

「…なに…？」

「メガネ、取って。」

お義父さんはそう言いながら、ずっと私に顔を近づける。

「う、うん……」

邪魔……なのかな。

私はそう思いながら両手でメガネを持ち、ゆっくりと外す。

お義父さんは目を閉じたままじっとしていて、なんだか時間が止まったみたい……。そっとメガネを外すと、お義父さんの瞼がゆっくりと開く。

メガネがないだけで、全然違う……。こんなに整った顔だったつけ。うまく息を吸えないくらい、鼓動がうるさい……。

お義父さんはそっと私の頬を撫で、そのままもう一度キスをした。

さっきみたいに強引なキスじゃない、逃げられるような……そんなキス。なのに私は……逃げられなかった。

理由なんて分からない。

「ん……んっ……あ、んん……」

唇を重ね、舌を絡ませる。

頭がぼーっとして何も分からない。

(中略)

「ひ、ああああ……っ、や……なんで……っ……あ、あ、あ……」

「許さないって言っただろ？」

お前が他の男の前で、こんな風に乱れるのを想像するだけで、はらわたが煮えくり返る。俺じゃないと満足できない身体にするまで、やめるつもりはない。」

淡々と吐く言葉は冷たいのに、狂氣的なほどの熱を感じる…。

その間もお義父さんの指は執拗にこりこりと優しく、でも的確に私を追い詰めていく。擦られる度に、腰が勝手に動いて、身体が熱くてたまらない。

「もう…っ、誰とも…シない…から、指、やだ、やだ…っ、身体、熱いよ…おおっ…！」
「そういう問題じゃないんだよ。」

もう遅い。

こんな中途半端な状態で終わらせられると思ってる所も、甘いんだよ。

お前のその反応一つ一つに、俺がどれだけ欲情してるか、何も分かっていない。」

（「もっともっと気持ちよくしてあげる。何も考えられなくなるように。」
プチギレお仕置きセックスの全容は製品版にて）